

グラスフェッドのすすめ

(有)シェパード 獣医師 松本大策

みなさんこんにちは。シェパードという会社で獣医師をしている松本大策です。最近の穀物高を受けて、というわけではありませんが、肉用牛生産の多様性のために、放牧や粗飼料主体による肥育についての情報が欲しいという依頼を受けました。いろいろな学者の先生が貴重な試験をなさっていますが、僕なりの考えや実践事例の中で、みなさんの参考になることがあれば、と思いお引き受けすることにしました。

この記事では、まず最初にグラスフェッドとは何か、そしてつぎにマーケティング（販売戦略）のお話し、その後で初めてグラスフェッドの実際をお話ししたいと思います。いくら作っても商売にならないと仕方ありませんし、そういう畜産農家さんが大勢いる事に心を痛めているのです。ですから、しっかり「仕事」として成り立つような戦略を立ててから、実際に取り組み方を考えたいのです。

1：グラスフェッドとはなにか？

まず、グラスフェッド、もしくはグラスフィーディングと呼ばれる肥育について、簡単にご説明しておきましょう。一般に肥育というと、穀物を主体とする飼料を多給します。これをグレインフェッド、もしくはグレインフィーディングと呼びます。まずは、このグレインフェッドについてしっかり押さえておきましょう。その方が、これから一緒に勉強するグラスフェッドの優位性や欠点、どのように消費者に受け入れてもらうか、などを理解しやすいと思うからです。

我が国が世界に誇る「黒毛和種肥育牛」の場合、短期肥育と呼ばれる約18ヶ月前後の肥育でさえ、1頭仕上げるのに5,4tもの穀物を給与するのです。1頭の牛から取れる枝肉は500kg前後ですから、約10倍以上の穀物を必要とするわけですね。

これは、他の肉用家畜と比較しても、同じ量のお肉を作るのに大変多くの穀物が必要となるわけです。たとえば、ブロイラー（肉用鶏）の場合、1羽を育てるのに最大で7kg程度の飼料で十分ですし、肉用豚の場合でも300~320kgの飼料で十分です。鶏の場合、精肉が1,125g（牛でいう枝肉は「中抜き」とよばれて1,825gになります）1羽あたり平均仕上がり体重2,600gですから、枝肉歩留まりは70.2%程度になります。

ご存じの通り、我が国は食糧自給率が40%を切っています。牛肉は日本で作

5400kg中の各飼料の重量

飼料	割合(%)	重量(kg)
大麦圧片	26.4	1426
トウモロコシB	6.3	340
専管フスマ	15.8	853
一般フスマ	22.0	1188
コーンミール	25.1	1355
大豆粕	4.4	238
	100%	5400kg

※ 表3-5を利用
※ 系統配合を無視し、100%に換算

各作物の作付面積と収量

穀物	作付面積 (ha)	収量 (t)	10aあたりの収量 (kg)
大麦 (二条大麦)	34500	128200	372
小麦	209700	910100	434
トウモロコシ (デント)	86100	4541000	5270
大豆	138300	226700	164

※ 農林水産省

肥育期間中に 肥育牛が消費する配合飼料を生産する ために要する耕作地の面積

穀物	収量 (kg)	耕地面積 (a)
大麦 (二条大麦)	1426	3.83
小麦	6222	14.34
トウモロコシ (デント)	111628	21.18
大豆	646	3.94
	119922	43.29

肥育牛一頭当たり43.29a (4329m²)の耕地を要する

東京ドームのグラウンドのみの面積は13000m²で、肥育牛3頭を
仕上げられる??

っても、そのエサである穀物はほぼ完全輸入品ですから、これも自給食料と言えないわけです。しかもかなり効率は良くないと言えるでしょう。

もう少し細かく肥育牛を育てるのに必要な飼料を見ていきましょう。じつは、この調査は、うちの新人の伏見獣医師がやってくれたものですが(めんどくさいことを押しつけてごめんね、伏見

先生) 肥育牛の飼料は大まかに、大麦・フスマ・特殊フスマ・トウモロコシ・ホミニーフード・大豆からなります。これら1つ1つについて、配合割合に基づいて肥育期間中に必要な量を産出したのが図1です。

そしてこれらの作物を収穫するのに必要な畑の広さを計算すると、図2のように、なんと肥育牛1頭を仕上げるのに必要な畑の面積は43.29a (4329m²)アールにもなるのです。東京ドーム球場の広さが13,000m²ですから、この面積の畑があっても、たった3頭分の肥育牛の飼料しか作れない事になるのです(図3)。

いま、日本ではかつてない穀物高と景気不透明感で畜産は大きな危機にさらされています。しかし、世界に目を向けると、「家畜のエサ」どころか

人間の食べ物が手に入らないような状況があるのです。そのような中で、いつまでも穀物多給型の肥育が、いまのような頭数で成り立つ可能性はかなり低い

と言えるでしょう。

さらに日本の食糧自給率が低下しているといいつつ、耕作放棄地は**haにも上っているというのです。しかも農業者の年齢はかなり高齢化していますから、さらにこの面積は増加すると思われれます。この耕作放棄地のうち、機械化がたやすい部分は穀類生産や効率的な粗飼料生産などに回し、機械化が難しいところは放牧によるグラスフェッドに利用する、といった方策を実施出来れば、かなり食料自給率も改善するのではないのでしょうか。

なんだか理屈っぽくなっていますが、僕はこういったことを知っておくと、グラスフェッドのマーケティング（消費者への売り方のこと）を実施して行くに当たって大変有利だと考えるのです。いまの日本の農業教育の大きな問題点の1つとして、「販売の仕方（マーケティング）を教えていない」という事が上げられると思います。これはひねくれた見方をすると、「都合の良い使い捨て技術者」を作っているとも考えられるのです。

ですから、僕はグラスフェッドによる肥育牛の生産について原稿を書くに当たって、まずグラスフェッドによる肥育牛肉の販売戦略について考えてみたいと思っています。

グラスフェッド（粗飼料による肥育）がグレインフェッド（穀物による肥育）に比べて不利だと考えられる点も押さえておきましょう。まず、なんといっても粗飼料と穀物では、含まれるカロリーやタンパク質の量が違います。ですから増体効率などは明らかに劣ります。また、グラスフェッドではグレインフェッドに比べて給与できるカロリーが少ないことから、余剰カロリー（吸収したカロリーのうち、成長や維持、運動に必要なカロリーなどを消費した残り）の蓄積である「サシ」の量についても明らかに不利です。

あとは、粗飼料による肥育牛肉では穀物多給の肥育牛肉に比べて「獣臭」が強い、という点も忘れてはなりません。これらの欠点は、逆に特徴として販売戦略に使うことも出来ますし、あるいは、消費者に不評な部分は改善の努力が出来ます。このあたりは、おいおい一緒に考えていきましょう。